

Juichi WAKISAKA Race Report

2014 AUTOBACS SUPER GT Round 5 -FUJI GT 300KM RACE -

◆◆ 不安定なコンディションに立ち向かい、11位フィニッシュ ◆◆

No. 19 Weds Sport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	9位	11位



■大会概要

開催日：2014年8月9日-2014年8月10日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：66周（301.158km）

入場者数：予選日18,500名、決勝日26,500名、合計45,000名

8月9、10日、静岡・富士スピードウェイにおいてSUPER GTシリーズ第5戦「FUJI GT 300km RACE」が開催され、No.19 WedsSport ADVAN RC Fの脇阪寿一は、チームパートナーの関口雄飛選手とともに予選9番手から不安定な天候の下でレースに挑んだ。レースは途中赤旗中断やSCランの導入など、いつも以上に先の読めないレース展開となる中、マシントラブルを抱えながらの厳しい戦いをクリア。11番手でレースを終えている。

ニューマシンが投入された今シーズンのGT500。併せて共通化された空力パーツの装着が一部義務付けられているが、シーズン中、富士スピードウェイでの一戦ではローダウンフォース仕様が採用されている。本来ならば、5月に開催された第2戦に続いてのパーツ装着となるところであったが、シーズン中にレギュレーションの見直しが行われ、第3戦オートポリスと第4戦SUGOの2戦もこのローダウンフォース仕様の空力パーツ装着が義務付けられた。これにより、チームでは十分な走行データをもとに、改めて富士でのマシンセッティングを進めることとなった。

■8月9日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:15-14:30 ノックアウト予選(Q1)

15:00-15:12 ノックアウト予選(Q2)

【公式練習】 12番手 / 1'31.402

夏休み、お盆休み真っ最中のスケジュールで迎えた第5戦富士。真夏の三連戦の真ん中にあたる今大会は、文字通り猛暑の中で繰り広げる熱い戦いになるものと思われた。ところが実際はさにあらず。折しも沖縄・九州地方からゆっくりとしたスピードで台風11号が北上しており、その進路具合によってイベントにどのような影響が出るのかすらわからない状態。搬入日の金曜日は薄曇りの過ごしやすい一日となったが、さすがに土曜日は怪しい雲が一面に張り出し、雨を懸念することになった。

午前9時からの公式練習は薄曇りの中でスタート。No.19 LEXUS TEAM WedsSport BANDOでは、これからのセッションで装着するタイヤがどう変化していくかを考慮し、できる限りスリックタイヤでのマイルージを抑える方向で走行に入った。まずは関口雄飛選手がドライブを担当。セッティングの確認をしたところ、クルマはオーバー気味であったことから、アンダー方向に調整する作業が続けられた。

流れができたところで19号車には脇阪が乗り込み、走行開始。ガソリン満タン状態でのロングランを行ってバランス確認など、引き続き作業を進める予定だった。だがGT300との混走枠の終盤、赤旗が提示されてセッションが中断。これでチームは消化メニューの変更を余儀なくされる。再開後は、混走、GT300専有走行を経てGT500の専有走行がスタート。チームの当初の予定ではセッションの終盤10分で関口選手がアタックシミュレーションを行うことにしていたが、脇阪の走行時間が少なかったため、この作業を脇阪が担当。結果朝のチームベストタイム1分31秒402をマークし、12番手となった。



【ノックアウト予選 (Q1)】 9番手 / 1'30.463

ノックアウト方式の予選、チームの Q1 アタッカーは関口選手。ウェット宣言は出ているが、まだスリックタイヤでのアタックが主流のコンディション。開始直後からピットを離れる車両はなく、残り時間がほぼ半分を過ぎる頃に 1 台、また 1 台とコースへ向って行く。しかしそのとき、セッションを終えてピットに戻る途中でトラブルになり、スロー走行していた GT300 の一台がピット入口で立ち往生。危険回避のために赤旗が提示され、セッションが中断した。

GT500 ではほぼ一周かけてタイヤを温めていたチームが多く、仕切り直しという好まざる状況となったが、関口選手は集中力をキープしたままアタックを行い、1 分 30 秒 463 の自己ベストタイムをマーク。前の車両とは 0.01 秒というほんの僅かなタイム差ではあったが、結果的にポジションはなんと 9 番手。GT500 では Q2 へ進出できるのは上位 8 台であるため、No.19 LEXUS TEAM WedsSport BANDO H は惜しくも Q1 で予選セッションに幕を引くことになった。

チームにとって大変悔しさが残るタイムアタックだったと思いきや、その様子を見守っていた脇阪は「あのタイムはなかなかのもの。ただベストラップの次の周に 100R でペースを落とした車両に引っかかりタイムロスしてしまったので、その周もアタックできていれば Q2 に進出する事が出来たのではと思うと残念ですね」とその結果を冷静に受け止めていた。「確かに 9 番手では Q2 に進出できませんが、これまでの予選からすればいい結果です。戦う相手がもう目前に見えてきたわけだから、もっと上を狙っていきな、という思いがチームの中にも芽生えてきた証拠」とポジティブにとらえていた。「僕自身、朝の公式練習で初めてニュータイヤを装着し、アタックのシミュレーションをしました。タイムこそもう少し出たのではというような感じでしたが、その分、タイムにも上がり幅があるだろうと受け取れたので、明日の決勝では晴れたら精いっぱい走りたいし、もし雨が強くなるのであれば、しっかりと降ってほしい。そうなると僕たちのチャンスも増えるので。とにかく足下をすくわれないう、決勝では今年のベストリザルトを狙っていきます」と力強く断言した。



■ 8月10日(日)

09:00-09:30 フリー走行 (09:40-09:55 サーキットサファリ)

15:00- 決勝 (66周)

【フリー走行】 14番手 / 1'45.552

予選日の夜は風雨もなく、静けさに包まれたサーキット周辺。だがしかし決勝日を迎えた朝は断続的に雨が降り続け、その後も降ったり止んだりを繰り返した。そんな悪天候にも関わらず、サーキットは前日に1万8500人、当日は2万6500人という多くの観客に沸く事となった。

フリー走行開始は午前9時。ライトオン、ウェット宣言が出される中でのセッションスタートとなり、No.19 WedsSport ADVAN RC Fは関口選手がまずステアリングを握った。決勝に向けての細かな煮詰め作業を進めようとしたが、コースイン早々にして雨量の増加にともないセッションが赤旗で一時中断。7分間の中断となり、その後も雨は時折雨脚を強めながら降り続けたため、チームではレインタイヤを何種類か確認するなど、最後の最後まで準備作業に追われていた。脇阪もセッション終盤でステアリングを握り、決勝に向けての最終作業に取り組んだ。



【決勝】 11位 / NO POINT (シリーズポイント: 7ポイント、シリーズランキング: 18位)

午後に向けて雨は一時小康状態から傘が不要な天候まで回復する。しかしあくまでも一過性のもので、再び風と雨がサーキット上空を支配することに。そして午後3時からの66周にわたるレースは、稀に見る出入りの激しい展開へと形を変えて行く。

GT500、9番手のグリッドにつけたのは関口選手。ダミーグリッド上でスタートを待つ中、横殴りの激しい雨となったことからレースはセーフティカー (SC) の先導にてスタート。3周目から事実上レースが幕を開けた。まずはポジションキープで序盤の戦いをクリア、しかし、その後すぐにクルマに不具合を抱えてしまったため、ポジションを下げてしまう。ところがその後、さらに雨量が増してレース続行が難しい状況へと陥る。そこでまずSCがコースイン。レーススピードをコントロールし、隊列を整えた。だがさらに雨量は増す一方。そこでついに17周終わりには赤旗が提示され、すべての車両がコース上で一旦停止する。

およそ30分強、天候回復を待って再びレースが再開、今回もSC先導で2周を走り、レースがリスタート。関口選手は14番手から追い上げを開始する。その後も雨との戦いが続き、レースはタフな展開に。幸いにもコースアウトやクラッシュなどの大きなアクシデントもなく、無事にレースは折り返しへと進んでいった。

ルーティンのピットインが次々と始まり、タイヤ交換、ドライバー交代を済ませるチームが続出するが、今回、チームでは遅めのピ

ットインを選択。天候次第で装着するタイヤを変更する作戦を考えていたからだ。少ない雨量、あるいは雨が止み路面の水が次第に少なくなれば、レインタイヤでの走行は厳しい。ならば敢えてギリギリまでピットワークを引っ張り、スリックタイヤでの勝負に挑もうと考えていたのだ。

しかしタイミング悪く、ピットイン目前となって雨が再び落ちはじめたことを受け、チームではレインタイヤでの走行に作戦変更。再び雨量が増しても対処できるようタイヤを選んだが、関口選手からバトンを受け継いだ脇阪がコースに向うと、残念ながらタイヤが思うほどグリップせず、ガマンの走りを強いられた。それでも果敢に攻め続けた脇阪。それに報いるかのような雨が残り10周の時点で降り始め、いざ勝負、の展開になるかと思われたのだが…。再びSCが残り8周の時点でコースイン。これにより追撃のチャンスが激減する。ぎりぎりまでリスタートすることを望んだチームと脇阪だったが、結局レースはこのままSC先導による走行にてチェッカー。終盤、スリックタイヤを装着し、再びレインタイヤ交換のためにピットへ戻った車両がいたこともあり、No.19 WedsSport ADVAN RC Fは11位でレースを終えている。



悪天候と激しい雨を味方につけるべく、戦略を練ったチーム、そして脇阪ではあったが、結果は厳しい展開になってしまった。「雨量が少ないコンディションだと、なかなかクルマのポテンシャルを發揮できない状況だったのですが、その中でまず関口選手も頑張ってくれたと思います。さらにはSC先導、そして赤旗による一時中断。また、雨の影響か、エンジンにミスファイアが出てまともなコンディションで走るのが難しい状況になってしまいました」とレース後に脇阪が振り返った。

「関口選手に規定周回数ギリギリまで走ってもらったのは、僕のステントのときにスリックタイヤが履ければそうしたい、という考えがあったからです。雨が少ない状態では不利な状況となってしまうので、それならばスリックで対処できるコンディションを待って勝負しよう。しかし、ピットイン目前でまた雨が降ってきたので、ハードのレインタイヤを着けてコースに向いました。しかし思うようなクルマのフィーリングを得る事が出来ず、ガマンの走行に。その後、土砂降りになったのであわよくば、と思ったのですが、またもSCが入り、結局そのままチェッカーになってしまったために為す術がなかったですね。結局のところ、僕らにとって天候が味方してくれなかったのかなと…。19号車が得意とする天候であれば、もっと面白い展開にもなったのでしょうか、悔しいですね。厳しい戦いが続きますが、モチベーションは常にキープしてますよ。次の鈴鹿では少しでも速く、少しでもいい結果を残せるように引き続き努力していきます」と気持ちを切り替え、鈴鹿に向けて新たな目標を定めた。

次戦は、8月30日(土)・31日(日)に鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)で開催される。

[Photo Gallery]



